

であるが、第三の衆生行業故こそ、われらの事實世界の形成される因縁である。事實世界の形成される因縁は種々なるも、直接的には衆生の行業に依るのである。單に世界が存在して衆生が在るのではなく、衆生の行業が世界を形成するのである。それ故に『經』には、「衆生心境 不可思議 業能悉起 一切刹海 衆生垢穢 國不清淨 行業無量 世界不同」と説かれ、衆生は行業無量の爲に、各々異つた世界を持つことが知らされる。その衆生の行業によつて異なる世界が、同時にまた菩薩の道場であり、如來の神力の故に成るとも言えるのである。

#### 四、世界海の種々形

また『經』には「一切諸業海 種々別異故」とか、「諸佛國土 起由心業 無量種形 而以莊嚴」と説かれてゐることは、衆生の業行が衆生世界の形を異にせしむることを教えるのである。世界海種々形とは、(一)方、(二)圓、(三)非方圓、(四)如水洄洑、(五)如華形、(六)種々衆生形等を擧げて、ここに業と世界との關係が具體的に形の世界を持つことを明している。この中、第六の種々衆生形については、法藏が『探玄記』第三に特別の關心を向け、衆生形即世界であつて、第六は如種々衆生形と言わぬ理由を詳説している。そこには、佛身即國土身、國土身即衆生身というような説明も與えられ、法藏の思想が表われてもいるが、端的に種々衆生形が世界であることは着眼したことは卓見であり、『經』意を直ちに汲みとつたものと言える。衆生形即世界という説は、われらの事實世界の最も具體的な理解の仕方

であると言つてよい。蓮華藏莊嚴世界というも、このような衆生業の世界と離れた世界ではない。衆生業世界海の事を轉じて開顯された如來の境界である。この『經』が佛自證の法界、蓮華藏世界を開顯し、表現することを面目としつつ、それと同時に、衆生の行業に由る世界の成立因縁を深く究めていることを重視すべきである。

#### 晩年の義門

多屋 賴俊

妙玄寺義門 天保十四年の八月十五日に五十八歳で亡くなつたのであるが、その天保十四年の二月から六ヶ月餘に渡つて旅行おし、歸つて來て八日目に亡くなつたのであつた。即ち二月十八日に自坊―若狹の小濱、妙玄寺お出發し、京都へ出、それから讃岐(香川縣)の丸龜へ行き、次いで備中(岡山縣)の西部長尾・笠岡へ行き、岡山、姫路を経て六月下旬に大阪に着き、七月二日に京都まで歸つて來た。義門はこの旅行に出る前から病氣おしいたのであるが、病お押しして旅に出たのであつた。そして途中に於いて度々重く患ひ、殆ど正氣お失うに至つたこともあつた。そして京都に着くと又重く病んで、もはや恢復の見込みもなく、歩くこともできなくなつて、郷里から嫡子や親戚の者が迎えに來た。ところが義門わ、いま手お着けている著述がでるまでわ歸らない、と言つて、どうしても歸國し

ようと言わなかったのであつた。それお強いて釣り臺に乗せてつれ歸つたのであつたが、義門がそれほど深い執念お以つて完成に努めていた著述わ、何という本であるのか、今まで分らなかった。またこの旅行がもとと甚だ無理であつたので、結果的に見れば、明にこの旅行が義門の命お縮めているのであるが、義門わ何故このような無理な旅行をしたのか、ということも從來明でなかつた。

義門の學問研究の跡お辿つてみると、二十三・四歳頃から著述を始め、五十八歳まで、或わ新しく稿お起し、或わ前の稿本お修正し、休みなく研究お續けている。そして出版したもののは、文政六年三十八歳の時に出した「反鏡」が最初で、次わ天保四年四十八歳の時に出した「和語説略圖」であつた。「和語説略圖」は國語學史上に一時期を劃する名著であるが、何分にもこれわ美濃版一枚の圖表であつた。義門が書物らしい書物を公刊したのわ、天保七年五十一歳の時の「山口栗」であり、次わ「活語雜話」、次わ天保十三年五十七歳で出した「男信」であつた。然しこのような事お調べてみても、義門が晩年に何故、無理な旅行おしたのか、晩年に命がけでしていた仕事わ何であつたのかお明することができない。

ところが最近、義門の晩年の様子お明にしうる資料が出て來た。實わ先月、學友三木京都女子大教授と一處に義門關係の資料お探しに岡山縣へ行つたが、玉島市の小野家で、義門から小野務に宛てた手紙十九通、その他四十點ばかりの資料に出遇うことができた。そのうち、天保十三年六月朔日附の義門の消息

わ義門傳の資料として殊に貴重な内容お有つていゝものであつた。これは巻紙に書かれたもので、縦四寸八分五厘、長さ九尺二分に及ぶもので、四百字詰の原稿用紙に寫して八枚弱になつた。さてその内容わ、先ず著述の出版についての苦心が縷々として記してある。この消息によつて、山口栗、男信等が義門の自費出版であつたことが初めて知られた。山口栗にわ三十兩餘り、男信にわ二十五兩ばかり費したこと。この春から「玉緒線分」の刊行に着手しているが、これにわ三十二・三兩を要し、半分わ出資者があるが、半分わ自分が負擔することになつて居り、自分の負擔する分の都合がつかないために、刊行が遅々として進まず、残念至極に思つていゝこと。上述の新井守村が、「話語指南」の出版を引受けてくれ、更に「於乎輕重義」も引受けようと言つていゝこと。最近、丸龜の津坂瑞臣が「橋立日記磯清水」の出版を引受けてくれたこと。出版を引受けてもらつた場合は、板權お渡すので、出資わ決して寄附ではなく、賣上金に依つて償還せられてゆくので、賣行がよければ出資者の利益になること等お述べ、自分にわ公刊したい稿本が澤山にあると言つて「活語餘論八冊」以下十部二十二冊の目錄お掲げ、このうちのどれかの出版お貴下（小野務）と倉敷の水澤定穀氏とで引受けてもらえないだろうか、若し兩氏がそれぞれ一部お引受けてできるならば無上の喜びであるが、ということお、控え目に、しかし強く依頼している。小野、水澤兩氏わ當時備中に於ける屈指の富豪で、ともに和歌に志し、文法に興味お有つていた。小野勢わ義門の教お受けていたが、水澤定穀も多分同

様であつたであろう。この兩人が若し本腰お入れて後援してくれるならば、義門の著述の公刊は容易であつたのである。なおこの消息にわ六月十八日に京都へ着き、二十日にわ小濱へ歸る豫定であると記してあるのも注意せられることである。次に七月十二日附で、京都から小野務に宛てた手紙にわ「玉緒線分」の彫板の費用に困つてゐる。十兩ばかり借してほしい、と記るされている。思うに義門が危険を冒して長途の旅に出たのわ、著述の出版について後援者お求める事が最大の目的であつたのであらう。そして、この著述ができ上るまでわ歸らないと言つたのわ、原稿の完成ではなくて、恐らくわ「玉緒線分」の彫板お意味するのであらうと考えられる(詳しくわ稿お改めて記すことにする)。

### チベットに於ける梵語文法の

翻譯者

稻葉正就

チベット譯大藏經は第七世紀から第一七世紀に亘つて翻譯せられたが、その間に八三八年に即位したランダルマ王の廢佛以後、約一世紀半の暗黒時代があつた。そして翻譯官 Rin-chen bzah-po (968-1065 A. D.) が佛教を復興し翻譯を再開したから、彼以前を前傳舊譯時代、以後を後傳新譯時代といはれる。いま私は、大藏經中の文典部と雜部に收められてゐる約五〇〇部程の

梵語文法書の翻譯について、その奥書に記されてゐる譯者を考察して行くと、年代不明であつた人が、既に年代の判明せる人と共譯してゐることによつて、その年代を大略推定し得る。かくて得た結論の中からチベット人の譯官のみについて簡單に記せば次の如くである。

Shi-pa bod——第一一世紀の人。西チベットの阿里の王家の出身。兄の Bryan-chub bod 王は有名な Atiça 招請(1024年チベット到着)に奔走した熱烈な佛教王である。

Chos-kyi ges-rab——第一一世紀頃の人。

Chos-kyi bzah-po——第一一世紀頃の人。Rabzom の譯官。インドの Dharma-bhadra と同一人でない。

Grags-pa rgyal-mtshan——1147-1216の人。密教學者であるとともにミラレームの詩に感銘をうけた神祕な詩の註釋をも殘してゐる。また歴史書及び醫藥書もある。

Nam-mkhañ bzah-po——第一三世紀頃の人。カーリダーサの Meghadūta の譯者。Tucci 教授は、この人は Csoma の子 Nam-mkhañ rgya-mtsho と同一人であらうといふ(Tibetan Painted Scrolls. I. p. 123)。やうするとトンミのチベット語の文法「三十」「性入」の註釋を書いたことになる。

Dpal-ldan Bsod-nams bzah-po——第一三世紀頃の人。

Čon-ston Rdo-rje rgyal-mtshan——第一三世紀後半から第一四世紀初頃の人。サキヤ派の詩人。宮廷詩鏡や韻律意讀を譯した。元の初代帝師八思巴(1235-1280)が元からチベットへ歸つた時に彼を讀へて歌つた詩がこの人の最初の詩の一つである。